

幼児同士が遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫 ～水遊びにおけることばかけや環境構成を中心として～



那覇市立真嘉比幼稚園教諭

下地 智子

目次

I	テーマ設定理由	1
II	研究目標	1
III	研究仮説	2
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	2
V	研究内容	2
	1 幼児期の人とのかかわりについて	
	(1) 幼児期の人とのかかわりの発達	
	(2) 幼児期の遊びと仲間	
	(3) 幼児期の遊びの楽しさ	
	2 教師の援助と環境構成	
	(1) 教師の援助	
	(2) 環境構成の工夫	
	(3) 計画的な環境構成とは	
	3 人とかかわりを深める水遊び	
VI	保育実践	6
	1 保育計画（全5時間）	
	2 保育の実践（実践5）	
VII	結果と考察	8
	1 作業仮説1の検証	
	(1) 互いのよさに気づき遊べていたか（学級全体の変容から）	
	①結果	
	②考察	
	(2) ひとり遊びの多いA児の変容	
	①結果	
	②考察	
	(3) いざこざを乗り越えていくB児とC児の変容	
	①結果	
	②考察	
	2 作業仮説2の検証	
	(1) 遊びへの意欲が高まり、幼児同士が遊ぶ楽しさが味わえていたか	
	①結果	
	②考察	
	(2) 検証前後の幼児の「聞き取り」による幼児の変容	
	①結果	
	②考察	
VIII	研究の成果と課題	12
	1 成果	
	2 課題	
	《主な参考文献》	

《幼児教育》

幼児同士が遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫 ～水遊びにおけることばかけや環境構成を中心として～

那覇市立真嘉比幼稚園教諭 下地 智子

I テーマ設定理由

近年の少子化・核家族化の社会現象など幼児を取り巻く環境の変化がきょうだいや同世代の子ども達が集団で遊ぶ場所や遊ぶ時間等にも影響を及ぼし、人とかかわる機会が少なくなったといわれている。

このような現状から、幼稚園教育要領の領域「人間関係」のねらいには「身近な人と親しみ、かかわりを深めること」「人とかかわる力」を育む必要性が示された。さらに「内容」(7)で、「幼稚園生活の中で、幼児は他の幼児と一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して、互いのよさや特性に気付き、友達関係を形成しながら、次第に人間関係が広がり深まっていく」と示され、幼稚園という集団の場で、他児とのかかわり合いを通して、友達関係を深めていくことが大切であるとされている。

これらのことから、幼児同士が他児とのかかわり合いの中で遊ぶ楽しさを味わうことが大切であると考えらる。

幼児同士が遊ぶ楽しさを味わうための工夫のひとつとして、水遊びが考えられる。幼稚園教育要領の基本と解説で「水遊びや砂遊びのように一中略一心地よいことを共有することは、人とつながることの心地よさの原点となる。」とある。幼児にとって水はとても身近な親しみのある素材である。水に触れることで幼児は気持ちを解放し、他者とのかかわりを広げ深めていけるであろう。そこで、必要なことは他児を意識させ、かかわらせる手立てである。その手立てのひとつとして「水遊び」の場の工夫である。幼児同士がかかわりを深めるような「ことばかけ」を中心とした援助や、幼児一人一人に応じた環境構成を工夫することで、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになり、人とのかかわりが深まっていけるであろうと考える。

これまでの保育実践を振り返ってみると、「仲間作り」や「協同性」を意識し共通のイメージや目的を共有しながら、遊ぶことを目指してきた。しかし、幼児同士で遊びを楽しんでいるかのように見えていたが、いつの間にか遊びから抜けてしまう場面が見られた。それは、教師が集団の中で幼児同士が遊んでいる表面的な姿に安心し、幼児一人一人の内面の理解やかかわりが不十分であったと反省する。また、幼児が夢中になって遊べるような、さらなる計画的な環境構成も不十分であった。

そこで、幼児が他児とのかかわりを深めようとする発達の過程を踏まえた上で、「ことばかけ」を中心とした援助や計画的な環境構成を工夫することで、幼児同士が遊ぶ楽しさが味わうようになると考え本テーマを設定した。

II 研究目標

幼児同士が遊ぶ楽しさを味わうための、教師の援助や環境構成の工夫について研究する。

Ⅲ 研究仮説

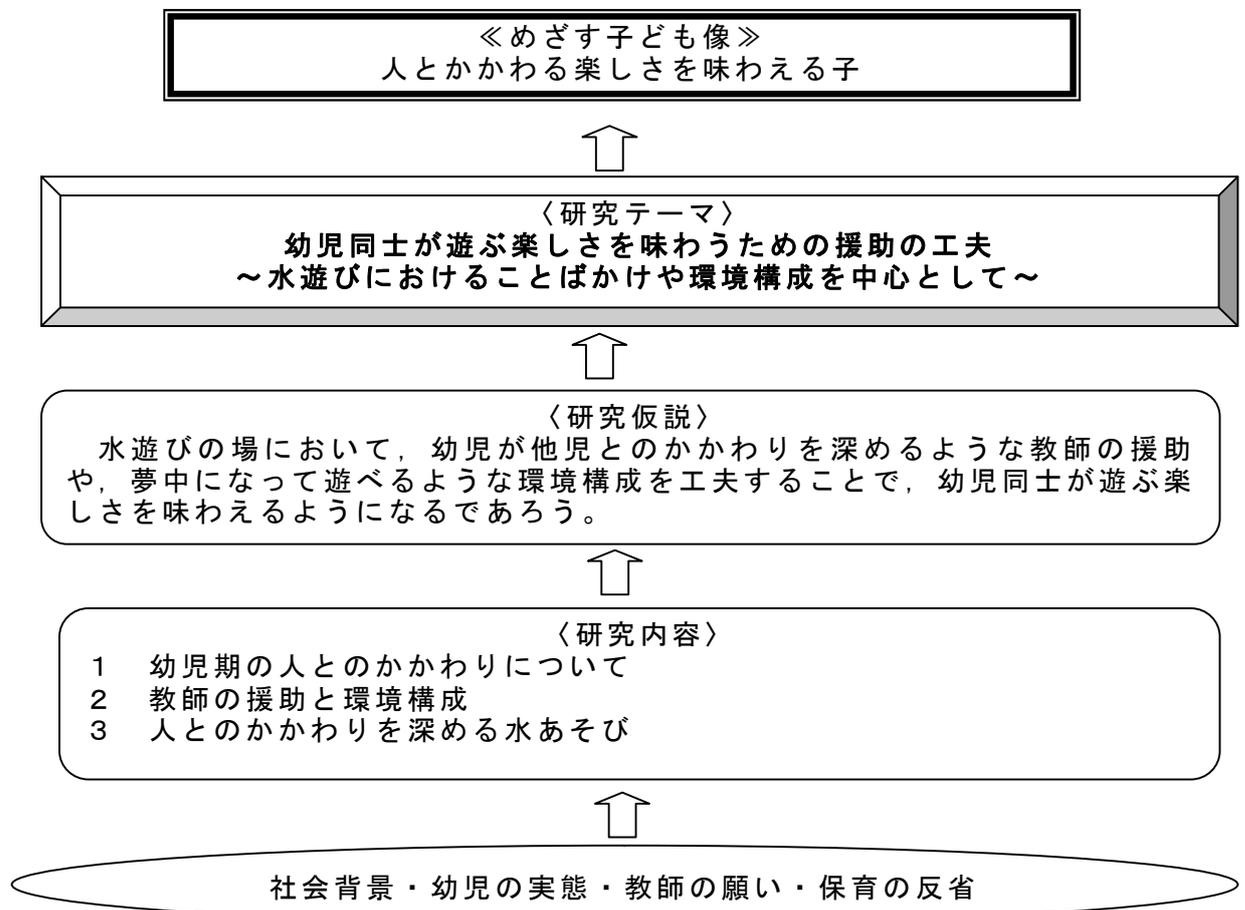
1 基本仮説

水遊びの場において、幼児が他児とのかかわりを深めるような教師の援助や、夢中になって遊べるような環境構成を工夫することで、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになるであろう。

2 作業仮説

- (1) 水遊びの場で、他児とのかかわりを深めるような「ことばかけ」を中心とした教師の援助を工夫することで、幼児同士が遊ぶ楽しさが味わえるようになるであろう。
- (2) 水遊びの場で、計画的な環境構成を幼児の発達の過程に応じて工夫することで、遊びへの意欲を高め、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 幼児期の人とのかかわりについて

(1) 幼児期の人とのかかわりの発達

幼児期の人とのかかわりとして、幼稚園生活や遊びを通して、教師との信頼関係に支えられながら、安心感を味わえるようになることで自己発揮していくようになる。幼児は自己発揮をする中で、他児に関心を寄せ、一緒に遊びたいという思いが

芽生えてくるようになる。その気持ちの高まりは、他者を意識し関心をもってかかわろうとするようになり、他児と過ごす心地よさを感じていけるようになる第一歩であると捉える。

さらに、他児と一緒に様々な活動することを通して、ひとりで遊ぶのも楽しいが他児と一緒にだともっと楽しいという気持ちを味わうようになり、様々な感情体験を重ねながら、互いのよさや大切さに気づき、人への信頼感が培われていくようになっていくのである。そのような過程をたどりながら、人とかかわる力が育まれていくと考える。

(2) 幼児期の遊びと仲間

幼児は遊びを通して徐々に仲間との関係を広げていくようになる。まず、ひとりで遊びを満足することで自己の存在を確信する。そして他者の存在に関心を寄せるようになっていく。傍観遊びや平行遊びなども一見、人とかかきがないように思われるが、他者の行動や情報を自分の中に取り込むことで、人とのかかわり方を模索していく過程にあると考える。仲間作りの第一歩である。次第に、他者とかかわる機会を重ね、イメージや目的を共有しながら役割やリーダー等の関係性が育っていく。その中で、「より楽しく遊ぶには」と他者と思いや考えを調整するなどの経験をしていくようになる。互いに調整するかかわりを通して、仲間関係を深め充実感を味わえるようになっていくと考える。

ここで大切なことは、教師は、遊びを理解し、個々の幼児が発達に必要な経験を得ているかを捉えることである。それらを踏まえ、D. Parten や保育用語辞典を参考に次のように分類し、幼児同士が、かかわりを深める遊びへの理解を図っていくものとする。

ひとり遊び・・・ひとりでものに深くかかわり満足している。

傍観・・・他児の遊びを観察している。他者への関心の表れ。

平行遊び・・・複数の幼児が同じ場にながら、それぞれが自分のしたい遊びをしているが、互いの存在を意識し刺激を受け合っている。他児の遊びを真似たりする。次第に、イメージを共有するようになる。

連合遊び・・・複数の幼児が目的をもって遊ぶが、役割が明確ではない。

協同遊び・・・複数の幼児が目的をもって遊ぶ。役割が明確で、リーダー、仲間関係の形成をしていく。

(3) 幼児期の遊びの楽しさ

幼児期の遊びは生活そのものであるように、幼児の成長発達に欠かせないものである。幼児が主体性をもって遊びに取り組むことで、発達に必要な経験を重ねていけると考える。幼児期の主体的な遊びについて無藤隆(2007)は、「あらたな活動に取り組むための原動力」や「外に向かってはたらきかけていく力となる」と述べている。遊びが幼児の原動力となり、他児とのかかわりを広げていくと考える。

幼児は、他児との楽しいかかわりや遊びを通してイメージを共有したり共通の目的を見出したりするようになる。そのような遊びの中で、ひとりでは実現できないことも、仲間と一緒にだと可能になると感じるようになり、達成感や充実感を味わえるようになってくる。

しかし、仲間との遊びは時として、衝突や葛藤する体験や折り合いをつける体験など煩わしさもある。それらは、一見否定的なことに感じられるが、互いのよさに気付くためにはとても大切な過程である。ここでの互いのよさとは、一緒に遊べて嬉しい、楽しいといった肯定的な面と、折り合いがつかないといった否定的な面を全て含んだことである。煩わしさや葛藤体験を乗り越える力について無藤は「なかまと遊ぶ楽しさを経験しているから」と述べている。そのため、幼児同士と一緒に過ごす心地よさを十分に感じ、味わうことが大切であると捉える。

幼児同士が互いのよさに気付き、折り合いをつけたり、かかわり方を学んだりしながら、それでも他児と遊ぶことが楽しいものだと感じていけるのが幼児期の遊びの楽しさであると捉える。

2 教師の援助と環境構成

(1) 教師の援助

幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになるためには、教師との信頼関係が基盤になっていく。教師が幼児ひとりひとりに温かな関心を寄せ、ありのままの姿を受け止めることで、幼児は自分に自信がもてるようになり、意欲をもって人とのかかわりを広げていけるようになると思う。

教師は、他児とのかかわりを広げ、仲間関係を深めようとする幼児の姿を支えていくことが重要である。そこで、幼児同士や関係性をつなぐことを意識し、下記のような「ことばかけ」「関係づける援助」を中心に据えて本研究の手立てとする。

○ことばかけ

幼児にことばをかけることによって、共感や励ましを受け信頼関係が深まる。アイデアや知識の提供をうける。漠然とした思いが明確になる。ほかとの教育的な作用を及ぼす。指示・命令の言葉は少なくして慎む。

○関係づける援助

人とのかかわりを広げる。遊びと遊びをつなげる。他の場や状況を変化に着目しさせる等、幼児の生活を豊かにしていくために、保育者が意図的に幼児同士の関係や場の関係、遊びの関係等をつなぐかかわり方。

保育用語辞典(2013)

(2) 環境構成の工夫

幼児は、生活や遊びの中で他児と直接的にかかわり合う体験を重ねながら、人とのかかわり方を身に付けていくと考える。また、友定啓子(2008)は幼児の人とのかかわりの状態に合わせながら変化発展させていく必要性を述べている。

それらを踏まえ、本研究では、幼児ひとりひとりの人とのかかわり方の経験の違いを、発達の過程に応じていくこととする。そして、幼児の遊びの育ちと、本園の幼児の実態から発達の過程をⅠ～Ⅲ期に分け、環境構成の視点を生かした工夫をしていくものとする。

I期・・・[ひとり遊び][傍観]ひとりで遊ぶことで満足感や安心感をもち、自己発揮する過程。

Ⅱ期・・・[並行遊び]大型積木や砂場のように、共通のものや遊具を共有することで他児に関心をもつよう一緒に遊ぶ楽しさが味わえるようになる過程。

Ⅲ期・・・[連合遊び][協同遊び] 思いや考えを出し合いながら自分たちのイメージした遊びを実現しようと共通の目的をもって協力して楽しめるようになる過程。

(3) 計画的な環境構成とは

計画的な環境構成について、神長美津子(2000)は「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児ひとりひとりの行動の理解と予測に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。」と述べている。さらに幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立たせ幼児の指導の計画性をできるだけ関連づけて考えることの必要性を述べている。

それらを踏まえ、幼児の行動を予想しながら、人とのかかわりを促していけるように、遊具や用具の種類や置き方を工夫し、幼児と幼児のかかわりを関連づけていくことも重要であると捉える。

3 人のかかわりを深める水遊び

幼児にとって「水」は日々の生活の中で触れる機会の多い、親しみのある素材である。また、夏の暑い時期に触れる水の冷たさは、生理感覚的に心地よさを感じやすいと考える。その「水」を使った遊びは、心も体も開放的な感覚を味わい、様々なことへ受容的な気持ちが育まれていく。特に、人への受容する気持ちも高まっていくと考えることから、幼児同士がつながりを感じ、かかわりを深めていくには最適な素材であると捉える。

そこで、水遊びを取り入れることで、様々な気持ちが育まれていくと考え、図2にまとめた。本研究では、幼児自ら好きな水遊び選択することで自発性や主体性を発揮し、必要な体験を重ねていくと考える。保育実践の中で図1の①～③の遊びを中心に取り入れることで、幼児自ら遊びを選択し、主体性をもった遊びとなるようにしていく。

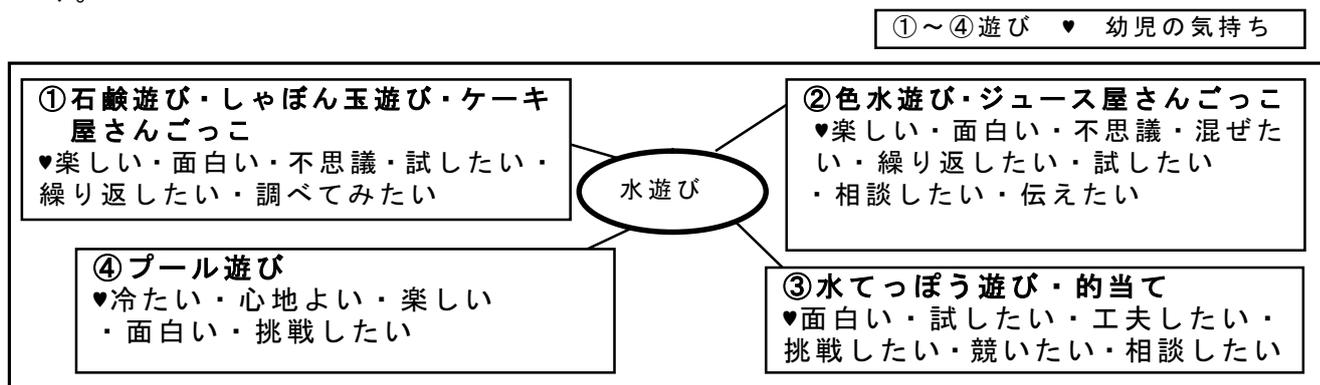


図1 遊びの広がり

本研究では、幼児の発達の過程に応じた援助と環境構成をしていくことを踏まえ、村由紀子・金田利子(2002)他を参考に表1にまとめたものを視点とし、保育計画や保育の実践5に活用していく。

表1 幼児の発達の時期に応じた環境構成と教師の援助の視点

発達時期	環境構成の視点	発達の過程に応じた援助
I期 ひとりで遊ぶことに満足感や安心感をもじ自己発揮する過程。	I環 ひとり遊び十分に遊びを満足させながら、他児の存在を意識させる。	I関 他児に関心をもてるようつなぐ。 Iこ その幼児なりの遊びを認めながら、他児に関心をもてるようにする。
II期 大型積み木や砂場のよう に、共通のものや遊具を共有することで、一緒に遊ぶ楽しさが味わえるようになる過程。	II環 ひとりではできない遊びの工夫をする。	II関 幼児同士のかかわりをつなぐ IIこ 幼児同士のつながりを支えることばかけ。
III期 思いや考えを出し合いながら自分達のイメージした遊びを実現しようと共通の目的をもって協力して遊べる過程。	III環 幼児同士と一緒に遊ぶことで楽しさを味わえるようにする。	III関 幼児同士と一緒に遊びを楽しめるようつなぐ。 IIIこ 仲介したり代弁し、ことばを投げかける事で幼児同士のかかわりが広がるようにする。

※本文での援助の視点
I～III・・・幼児の発達の過程 環…環境構成 こ…ことばかけ 関…関係づける援助

VI 保育実践

1 保育計画(全5時間)

実践	活動	◎ねらい	環境構成	教師の援助
1 5 2	水と仲良くなろう	◎水の感触や心地よさを親がいろいろ楽しむ。	I環 じっくりと遊べるように遊具や道具を豊富に準備する。 II環 試したり、工夫したりできるように、モールやホース、フープを準備する。	Iこ 幼児の水への親しみ方を捉え、安心して遊べるようことばをかける。 I関 幼児ひとりひとりの遊びへのかかわり方を認め、自己発揮し自信をもたせる。 Iこ 「きれいだね」「素敵だね」等ことばをかけ、取り組みを認める。
3	水遊びをしよう	◎他児と一緒に楽しむ。	II環 共通に関心をもてるようにピッチャー・カップを用意する。 III環 遊びに必要なものを作るように、画用紙、ダンボール、牛乳パック、マジックを準備する。	I関 必要に応じて、教師が遊びのモデルになるよう一緒に遊びながら、他児を意識していくようつないでいく。 II関 「一緒に色水しよう」と遊びに誘いながら、きっかけをつくる。 IIこ 「皆にも教えてあげてね」と他児とのかかわりがもてるようことばをかける。
4	みんなで水遊び	◎他児と一緒に楽しむ。	III環 他児と遊びの続きができるよう、必要に応じて幼児の作ったものを残す。 II・III環 作ったものを飾れる場所を設け、友だちの遊びの刺激を受け、同じことをしたいという思いや、遊びのイメージを広げていけるようにする。	II関 「〇〇さんのこのようなアイデアがあるよ」互いのよさに気付いていけるよう、幼児同士のかかわりをつなぐ。 III関・こ 幼児同士が思いや考えの違いから、いざこざ等生じる場合は、「どうしたら楽しく遊べるか」と考える場とし、必要に応じて仲介したり代弁したりしながらかかわりを深めていけるようにする。
5 本時	みんなの水遊び	◎他児と一緒に楽しむ。	III環 幼児と相談しながら、必要な遊びの遊具を準備する。	III関・こ 友だちのよさに気付いていけるよう、伝え合う場を設ける。

2 保育の実践(実践5)

(1) 保育仮説

- ① 水遊びの場において、発達の過程に添ったことばかけを中心とした援助を工夫し、幼児同士のつながりを支えていくことで、かかわりを深め、遊ぶ楽しさを味わえるようになるであろう。
- ② 水遊びの場において幼児の興味や関心に応じながら、環境構成をすることで、遊びへの意欲が高まり、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになるであろう。

(2) 保育の展開

時間	◆ 幼児の活動 ○ 幼児の姿	環境構成・・環	教師の援助・・こ 関
9:30	◆ 話し合い		
9:35	<p>保育仮説①の検証</p> <p>色水あそび ○友だちと一緒にピッチャーに色水を入れたり、「ジュース作り」をする。</p>  <p>しゃぼん玉 ○友達と一緒にモールを色々な形の輪を作り、しゃぼん玉を飛ばし遊ぶ。</p> <p>水でっぼう ○自分達で作った牛乳パックの的に水でっぼうを当て「100点！」と決め遊ぶ。</p> 	<p>こ 「今日はどんなことをしたい？」と投げかけ</p> <p>関 遊びのイメージを広げたり、目的をもたせたりする。</p> <p>関 教師も一緒に遊びの中に入ること、かかわりのモデルになる。</p> <p>環 個々でじっくりと遊び込めるような遊具や用具を豊富に準備する。</p> <p>環 他児と協力する遊びの必然性が生まれるよう、ピッチャーや大きいペットボトルを用意する。</p> <p>環 お店屋さんごっこでイメージをふくらませ、共通の目的をもって遊べるよう、マジックや画用紙を用意する。</p> <p>こ 「おいしいジュースはいくらですか？」とお店屋さんごっこの遊びのイメージが膨らんでいくようにことばをかける。</p> <p>関 衝突する場面では、互いの思いを受け止めながら、かかわりを支えていく。</p> <p>環 試したり工夫したりできるようフープを準備する。</p> <p>こ 「○○さんに、大きいしゃぼん玉の作り方を聞いてみよう」他児のよさに気付いていけるようことばをかける。</p> <p>環 幼児同士で作った雲艇に的を下げる。</p> <p>こ 「○○さんにも教えて？」と他児の遊ぶ様子にも気付いていけるようことばをかける</p> <p>関 幼児のアイデアを他児にも伝え、一緒に遊ぶ楽しさが味わえるようつなぐ。</p> <p>関 衝突する場面では、互いの思いを受け止めながら、必要に応じながらかわりを支えていく。</p>	
10:15	<p>保育仮説②の検証</p> <p>◆ 振り返り</p>		
10:20	○楽しかったことや明日もやりたい遊びを伝え合う		<p>こ 幼児なりの表現を認め、個々に応じて代弁しながら伝えられるようにする。</p> <p>関 幼児の思いを受け止め、満足感を味わえるようにし明日への期待感を持たせる。</p>

VII 結果と考察

1 作業仮説1の検証

水遊びの場で、他児とのかかわりが深まるような、ことばかけを中心とした教師の援助を工夫することで、幼児同士が遊ぶ楽しさが味わえるようになるであろう。

(1) 互いのよさに気づき遊べていたか(学級全体の姿から)

① 結果

他児のよさに気付いたり、他児とかかわりながら遊ぼうとする姿の変容を幼児の聞き取りや行動観察から表2にまとめた。

表2 幼児の姿・ことば(他者のよさに気付いている)

実践	幼児の姿	教師のことばかけ	○変容した幼児の姿 「 」ことば	人とのか かわり
1 3	○同じ場所でそれぞれの遊びを楽しむ。 ○他児の遊びを目で追う	「見て見て○○さんの遊び面白いよ。」と他児に関心がもてるようにする。	○「○○さんみたいに、シャボン玉したいな」「泡が多く出せてすごい」「○○さんと同じ色にしたいな」	<u>他児に関心</u> をもち始めている。
4	○他児の遊びを真似て、同じ遊びを楽しむ。 ○思いや考えを出し合いながら遊ぶ。 ○試したり、工夫し試行錯誤しながら遊ぶ。	「○○さんの(しゃぼん玉の輪)形も面白いし、△△さんの輪の形も素敵だね。」と、遊びへの取り組みを <u>幼児同士に伝える</u> 。① 「□□さん達の遊びで今こんなことが困っているんだね。Kさんこの間やっていたよ」と他児のよさを伝える。	○互いに、作ったしゃぼん玉の輪を見せ <u>合い色々な形に変え楽しむ</u> 。 ○「難しいからKさんに聞いてみよう」② 「Kさんなら分かると思う」	他児と一緒に遊ぶ <u>楽しさを味わえる</u> ようになってきた <u>他児のよさに気づき</u> は始めている。
5	○的当てやジュース屋さんごっこ等、共通の目的をもって遊ぶ。 ○自分たちで遊びを進める。	「今日は、どんなことをして遊ぼうか」と遊びの見通しを持たせ、誰と遊びたいか考えさせる。 「おいしいジュースはお幾らですか？」と教師も楽しみながら、遊びのイメージを広げていく。	○「今日一緒に遊ぼう」「いいよ」「水掛けていい?」「えーだめ」「足ならいいよ」「ジュース屋さんの看板描こう」「 <u>明日も遊ぼうね</u> 」「 <u>遊びたいな</u> 」③	<u>他児との遊びの楽しさに気づき</u> 始めている。
検証後	○「今日は○○と遊びたい」⑤と気の合う友達を誘いあって遊ぶ。	「どうして、○○さんと△△さんは仲良しなの?」と他児との遊びの楽しさを感じていけるようにする。	○「一緒に遊ぶと気持ちほわほわ(心地よい)する。」④「優しいから」「遊ぶようになって楽しい」「水てっぼう遊んでいる時おもしろい」「頑張っているから」	他児のよさに気づき、かかわる <u>楽しさを味わっている</u>

② 考察

表2の結果から、幼児同士に互いのよさを伝えることばかけ①をすることによって、「Kさんに聞いてみよう」「Kさんなら分かると思う」②となった。それは他児のよさに気付きはじめていると考える。また、「明日も遊ぼうね」「遊びたいな」③「一緒に遊ぶと気持ちがほわほわ(心地よい)」④からも、他児を大切な存在として意識しかかわる楽しさを味わっていると考える。下線⑤のように具体的に他児の名前を挙げる回数が増えたことは「友達」という存在をより意識し、仲間関係を形成していこうとする表れであると考えられる。

(2) ひとり遊びの多いA児の変容

① 結果

A児(発達の過程I期)は、朝登園の際母親と離れることを渋ったり、朝の会が始まってもロッカーの隅の方で、ひとりでいたりすることが日常となっていた。学級の友だちが戸外に出はじめる頃に、所持品の始末を行うなど、自分のペースで動くことが見られた。園生活や遊びに対して戸惑いが見られたA児の変容を下記に示す。

表3 ひとり遊びの多いA児の変容

	幼児の姿	発達の過程に応じた援助	幼児の変容
検証前	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなと離れてひとりで遊ぶことが多い。 ○他児に話掛けられると、戸惑っている。 ○しゃぼん玉あそびでは、じっくりと遊ぶ。 	<p>I 関 しゃぼん玉遊びに誘いきっかけをつくる。①</p> <p>I 二 「きれいだね」「楽しいね」とA児の遊びへの取り組みを認める。</p> <p>I 二 I 関 「〇さんと同じ形で面白いね」と他児との関係をつなぐ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○他児の作ったしゃぼん玉の輪(ハート型)を真似る。② ○しゃぼん玉遊びをきっかけに、色水遊びにも関心を示し、自ら遊びを見つけ遊ぶ。
検証保育時	<ul style="list-style-type: none"> ○何度も何度も花を摘み片づけの時間がきても色水作りに没頭する。③ ○他児が話しかけると、少し間があるが応える。 	<p>I 関 他児のしている色水遊びの近くにA児の座る場所を設ける。</p> <p>II 関 「〇さんが道具の場所知っているよ」と他児に関心がもてるようつなぐ。</p> <p>I 二 A児の思いに寄り添い必要に応じて、代弁する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○振り返りの場で、皆の中心に座る。③ ○他児と顔を見合せながら手遊びを楽しむ。 ○楽しかったことを進んで発表する。④
検証後	<ul style="list-style-type: none"> ○自ら母親と校門で分かれ走って教室に入る。 ○「今日は〇〇したい!」と期待をもつて遊ぶ。⑤ 	<p>I 二・関 「Aさんは楽しいことを見つける名人だね」とA児の頑張りを認め、自信につなげるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○「仲良しの友達は〇〇だよ」と他児に関心を寄せる。⑥ ○遊びの場で、他児に遊びのアイデアを教える。

② 考察

しゃぼん玉の場面で下線①をすることによって、今までひとり遊びが多かったA児が、他児の存在を意識し他児の遊びを下線②のようになったと考える。そして振り返りの場の、下線③④は、A児の自信の表れであることが分かる。A児の発した検証後の下線⑤⑥から、A児の変容は自発的に遊びを楽しみ、友だちと過ごす心地

よさを味わえるようになってきたと考察する。よって、仮説1の手立ては有効であったと考える。

(3) いざこざを乗り越えていくB児とC児の変容

① 結果

表4はB児とC児の変容をまとめたものである。B児とC児(発達の過程Ⅲ期)はペットボトルのキップを使う順番からいざこざが生じた。いつもなら、C児が譲るのだが、今回は頑として主張を曲げなかった。近くで遊んでいたD児も妥協点を提示するが、納得がいかず黙っていた。会話がなく黙っていたが同じ場所で遊びを続けていた。幼児の変容の中から、振り返りの場で、「明日もB・C(互いに)と続きをしたい。」と発表する姿が見られた。

表4 いざこざを乗り越えるB児とC児の変容

	幼児の姿	発達の過程に応じた援助	幼児の変容
検証前	○BとCは同じグループで衝突すると、いつもC児が譲ることが多い。	<u>Ⅲ関</u> 互いの思いを受け止めつつ、相手の気持ちに気付いていけるように話し合う。	○お互いの気持ちに気付いてバツが悪いのか、遊びから抜け、気持ちを切り替えていた。
検証保育時	○ペットボトルのキップを誰が使うかで衝突する。 ○いつもなら譲るC児だが今回は頑として譲らない。	<u>Ⅲ関・こ</u> 「同じキップが使いたの?」と、互いの思いを整理する。 「どうしたらいいかな?」「交替したら?」 <u>折り合いをつける体験を支える。①</u> 互いの気持ちを整理し、「楽しく遊ぶにはどうしたらいいのか」を関係づける。	○二人は会話なく黙っていたが、同じ場所で「ジュース作り」を行う。 ○しかし、 <u>振り返りの場では、BとCも一緒に遊ぶことが楽しかったと発表する。②</u>
検証後	○同じグループでの活動でも互いに名前を呼び合い遊びに誘いあう様子が見られた。	<u>Ⅲ関</u> 互いのよさに気付き受け入れながら遊ぶ楽しさを味わえるようにする。	○時々衝突する場面も見られるが、互いに「仲良しだよ」「ねー」 <u>③</u> と伝え合いながら遊ぶようになった。

② 考察

幼児が他者とのかかわり方に気付けるよう、教師が善し悪しを決めるのではなく、二人の気持ちに寄り添いながら、下線①をすることで、B児はC児の思いに気付くきっかけとなったと捉える。C児はいつもなら気まづくなると、遊びを抜けてしまうのだが、黙りながらも同じ場所で遊びを続けていたことは、仲直りのタイミングを図っていたのだと考える。それは、振り返りの場で、下線②の姿から、いざこざを乗り越えていったと考察できる。

検証後も、衝突する姿が見られるが、下線③と伝え合いながら遊ぶようになった。B・C児は互いのよさや特性に応じたかかわり方を模索し、自分の気持ちに折り合いをつけ、葛藤する体験を乗り越えたことで、友達関係が深まりつつあると捉える。

そのことは、衝突してもやっぱり友達と遊ぶのが楽しいという幼児期の友達関係を深めていこうとする過程であると考察する。

以上の作業仮説1の結果と考察から他児とのかかわりが深まるようなことばかけを中心とした援助の有効性が伺える。

2 作業仮説2の検証

水遊びの場で、計画的な環境構成を幼児の発達の過程に応じて工夫することで、遊びへの意欲を高め、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わえるようになるであろう。

(1) 遊びへの意欲が高まり、幼児同士が遊ぶ楽しさを味わっていたか。

① 結果

実践を通しての的当てへの参加人数の変化と教師の意図を絡ませた環境構成の工夫をすることによって、見られた幼児の変容を表5に記す。

表5 計画的・意図的な環境構成の工夫

実践	手立て前の 幼児の姿	手立て		手立てによる 幼児の変容	的当ての 参加人数 の変化
		教師の意図・援助	環境構成		
1 5 2	○互いに水で水をつぼで水を掛け合い遊んでいた。	「人」に当てるのではなく、「的」に当てる楽しさに気づかせたい。	<u>Ⅱ・Ⅲ環</u> 水てつぼの配置を「木」の近くに変えた。①	○「木」を的に見立てて遊び始め、傍で見ていた子も参加して遊ぶ。②	3～5名 ↓
3	○「木」に当て「○点当たった！」と競い合いを意識した遊びになった。	遊びのイメージを広げてほしい。幼児の「的」に対するアイデアを学級全体に投げかけた。	<u>Ⅱ環</u> 話し合いの場を設け③、的当てのイメージを明確にしていく。	○男児を中心に④、ダンボール製の的当て作りをする。女児は男児の様子を気にして傍観する。	7～8名 ↓
4	○他児と一緒に作ったダンボール製の的当てで遊んでいた。	幼児同士で、遊ぶ楽しさを感じていけるよう、幼児の的当てのアイデアを大切に、遊びをつないだ。	<u>Ⅰ・Ⅲ環</u> 幼児が作った的当てを雲梯に下げ⑤、ひとりでも、他児同士でもかかわれるよう配置した	○遊びの中でダンボール製の的当てが壊れた。話し合いの場で、「次も遊びたい」との思いから、牛乳パックで新たな的当て作りが始まり女児も一緒に加わる⑥。	12 ～15名 ↓
5	○牛乳パックの的当て作りが始まり、次々に参加数が増え、学級の7割の子が参加した。	共通の目的を持って遊べるよう、一つの的当て作りで7～8名のグループ構成をした。	<u>Ⅱ環</u> マジックを用意する。みんなで作った色鮮やかな的を雲梯に下げる。雲梯の近くに水てつぼやタライを配置する。	○幼児は、みんなで作った的当てを楽しみ「第○ステージだったよ」と思いや考えを伝え合いながら遊ぶ。これまで、水遊びや水てつぼうに関心を示さなかった幼児も参加し、「明日もやりたい！」と期待している⑦。	16 ～20名

② 考察

幼児が、主体性をもってかかわれるように意図的に下線①をすることによって、幼児の興味や関心を引き出し下線②になった。さらに、下線③をすることで、幼児同士のかかわりを深める機会となり下線④⑤⑥に増え、下線⑦と的当てへの参加人数の増加から水遊びへ意欲が高まっていったと考える。

また、幼児同士が、的当て作りという共通の目的をもちながら遊びを進めていくことで、イメージした遊びが実現していく、充実感や満足感を味わえたと考える。幼児同士が遊びの充実感や満足感を共有したことで、さらに遊びの楽しさが増したのだと考察する。よって仮説2の有効性が伺える。

(2) 検証前後の幼児の「聞き取り」による幼児の変容

① 結果（「友達」を意識していく幼児の変化）

図2は、幼児への「聞き取り」調査から「友達」を意識していく幼児の変化を示したものである。検証前は、ひとりで遊ぶことが楽しいと答え幼児が23%で検証後は0%であった。また、検証後は友達と遊ぶことが楽しいと答えた幼児が100%となり、「友達」の存在を意識し関心をもってかかわるようになった様子が分かる。

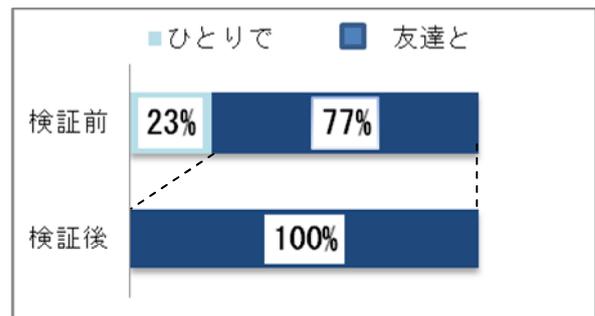


図2 「友達」を意識していく幼児の変化

② 考察

図2の結果より、検証前は「友達」という意識が漠然としていたものが、検証後には、「友達」という意識が明確になったと捉える。「友達」を意識していくことで、他児への関心が高まり、友達と遊ぶ楽しさを味わう姿が見られるようになったと考察する。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 幼児の発達に応じながら、幼児のよさを認め他児のよさにも気付いていけるようなことばかけを中心とした援助をすることで、友達を意識しかかかわろうとする姿が見られるようになった。
- (2) 幼児の発達に応じた、計画的な環境構成を工夫することで、遊びへの意欲が引き出され、幼児が友達とかかわり合いながら、遊ぶ姿が見られるようになった。

2 課題

- (1) 人へのかかわりがより深まるような、援助や環境構成の工夫
- (2) 幼児ひとりひとりのよさが生かされるような、仲間作りの工夫

《主な参考文献》

- | | | | | |
|-----------------|----------------------|-------|---------|----------------|
| 『幼稚園教育要領解説』 | | 文部科学省 | フレーベル館 | 2008 |
| 『幼稚園教育要領の基本と解説』 | 無藤隆 柴崎正行 | 秋田喜代美 | フレーベル館 | 2008 |
| 『人間関係』 | 無藤隆 | | 萌文書林 | 2007 |
| 『保育内容人間関係』 | 森上史郎・小林紀子・渡辺英則 | | ミネルヴァ書房 | 2009 |
| 『保育用語辞典』 | 森上史郎・柏女霊峰 | | ミネルヴァ書房 | 2013 |
| 『4歳児の自我形成と保育』 | 岡村由紀子・金田利子 | | ひとなる書房 | 2002 |
| 『幼稚園じほう』 | 全国国公立幼稚園長会事務局 「じほう部」 | | | 2004 2005 2009 |
| 『計画的な環境構成』 | 神長美津子 | | チャイルド本社 | 2000 |